

Title	ヘーゲルの選言推論 : 概念と実在性
Author(s)	吉田,六弥
Citation	哲学論叢. 1980, 6, p. 43-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66769
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 、ーゲルの選言推論

## — 概念と実在性 -

吉 田 六 弥

材 概念論は伝統的な論理学と同じ素材と配列とを有す。しかしながら、この「出来あがった、固定した、化石のような素 もっともヘーゲル自身この点を明言しているのではない。しかし、これら二部門の必要性はこの論理学の中で折にふ 最初の二つはヘーゲル独自のものとみられるが、本質論はカントの『純粋理性批判』の付録の「反省概念の多義性」 ( I. 211)。このため、この概念論における論理規定やその規則の理解は普通の論理学のそれとは異なっている。しか れて述べられており、また彼の『精神の現象学』で示された思想の中にも根拠をもっている。これに対し、第三巻の(ヨ) や同じ著作の「先験的弁証論」の部門で主張された仮象の客観性に関る思想と関連をもっていると思われる(I.38)。 <sup>(2)</sup> 周知のように、ヘーゲルの論理学は三つの部門から構成されている。即ち、有論、本質論、概念論の三部門である。 を「流動化」して、この素材の中に再び「生きた概念をもえたたせようとする」のが ヘー ゲルの 意図であった

253)。次に、概念は否定性を通して自己を区別する。この区別された概念の姿が判断 (Urteil)である。この判断も通(4) 常の判断の分類をもってはいるが、この区分の展開そのものはヘーゲルの論理学の仕方によっている。推論も判断と が、ヘーゲルは通常の概念の区分についても彼の考え方を述べ、このような区分の不適切なることを指摘している(II. 三つの規定をもち、それは普遍、特殊、個別である。ヘーゲルの論理学においては概念の規定はこの三つに限られる 己規定の道程に従っても、前述のようにヘーゲルの概念論は概念、判断、推論の三つの形式を含む。概念そのものは は「自己を規定して客観性とする」のである ( II. 353 ) 。 本論では、この推論の最後の形である必然性の推論を考察し ものに留っている。こうして、概念の実在化は概念の外で進行する。しかし、概念が客観性に媒介される限り、 っている。 おける推論は概念の主観的で内的な過程を完成し保持するとともに、この概念を主観性から客観性に導く役割をも担 同様概念の自己規定と実在化とをなすのであるが、更に概念の内的な過程はこの推論によって完成される。概念論に ル自身主要な事柄としている否定性が概念や事物の根底におかれていることであろう。この点は別にして、概念の自 しむしろ、ヘーゲルのこの部門の解明は思考や事物の実状に即しているように思われる。一層問題となるのはヘーゲ 概念論は普通の認識を概念の規定に還元するものであるから、推論においても「個別は普遍である」とか「個別は 概念の自己規定は同時に概念の実在化である。自己を規定する概念は自己を他在に委ね、 自らは内的なも 概念

の推論と必然性の推論とする。この区分は普遍、特殊、個別のいずれが媒概念を務めるのかによるのであるが、 特殊である」という認識が問題にされる。ヘーゲルは推論を大きく二つに区分して、定有の推論(質的推論) の推論では特殊が、反省の推論では個別が、必然性の推論では普遍がそれぞれ媒概念である。更に、この区分のもと

定であって、

主語が他者と関係する面を表わす。有用かどうかは銅のみにおいては決まらず、

反省の推論は「銅は有用である」というような判断(反省の判断)

を含む。この判断の述語

銅を有用と考える人間

類に従えば、定有の推論は「バラは赤い」というような判断を扱う。この判断が示すように定有の推論がもつ概念は〔5〕 帰納推論、 三つの形式は伝統的な推論の三つの格に対応し、以下の推論で順次その内実の充実を得る。反省の推論では全称推論 論に現われるような判断である。しかし、定有の判断においては述語は主語の規定性から独立している。 述語を主語をバラたらしめているバラの生命の内的な原理とみなすことも可能である。この場合、この判断は選言推 バラも先の述語の中で自己の規定を保持することができない。ここでは、赤さは決してバラの赤さではない。 方、質は物の性質としては物の自己反省の面を含んでいる。主語の存立は性質の中へ解消する(II.114f.)。このため、 規定の外で抽象的に考察される。定有の判断においても、主語は自己が何であるかを述語において示す。しかし、一 すべて質であって、それぞれ外面的な自立性をもっている。従って、主語も述語も自らを媒介に引き入れることがな るから、「バラは赤い」とか「バラは植物である」というような認識も推論の中で考察され得る。 れも伝統的な名称が採用されている。しかし、存在するものや観念もまた概念や概念の規定として捉えられるのであ で普遍、特殊、 いる。そしてこのことはもっと後になって解明されることである。更に、「バラは赤い」という判断において、 の「赤い」は主語であるバラの規定性に浸透されねばならぬが、しかしこの場合、この述語はバラの種差となって この判断を媒介することは両者の外におかれる。そして、概念の規定は具体的な事物から遊離しており、 類比の推論の三つが、必然性の推論では定言推論、仮言推論、選言推論の三つがそれぞれおかれて、 個別の三者がまたそれぞれ媒概念となるので、総計九個の推論形式があることになる。定有の推論の 例えば先にあげた分 事物の いず

出され、概念の過程に引き入れられる。こうして、反省の推論はこの相関性を通して実体性、 的で具体的な存在である。 はこのようにして他者に反省しつつ自己に反省している。従って、 性は反省された自立性にすぎない。こうして主語は自己に帰って、 の存在が必要である。「有用性」においては銅もその自立性を失っていて、有用性は主語の外にある自立的な概念の 主語は概念と関係するようになる。そしてこのように概念の段階を前にした推論が必然性の推論である。 として現われることになる。即ちそれは主語の規定性となるのである。逆に、主語も概念に対する無関心性から引き しかし、右に述べたように、反省規定には二つの存在が反省しているのであって、反省規定の自立 反省の推論以降は、概念の規定性がその抽象性を脱して、ある具体的存在に含まれるもの 主語は他者から自己に反省したものとして、 推論の過程の進行は主語の側で行なわれる。 因果性の段階に進み、 主語

### 二、必然性の推論

343)。もともと、 のである。そこでは、主語の媒介する活動も主語自身においては媒介として措定されていず、媒介は媒介する主語と この存在の規定も単に区別されたものの一つにすぎない。このため反省の推論における普遍性はまだ抽象的であった に承認され」、「前提されていた」にすぎない (I.334)。そこでは、主語は特定の具体的存在という意味をもつにすぎず、 「単純な規定された普遍性」であり、他方推論の両項の規定性を含む「客観的な普遍性」即ち「類」であるとされる(II・) いて再び単純な自己同一性に反省し特定の内容をもつようになる。かかるものとして必然性の推論の媒概念は一方で 定有の推論の抽象的な媒概念は反省の推論において、規定された区別へと措定され、この区別は必然性の推論にお 反省の推論の主語は類の個としてこの普遍性を含んでいたのであるが、しかし、この普遍性は

思われる。 言推論は、 とは媒介である。 自身の選言推論の論述においても、カントが理想と選言推論とを対応 させたことについてそれ程留意していない カントの哲学上の功績を高く評価するヘーゲルも先に述べたように、 推 既にカントによって概念と存在との合一である理想乃至最高の存在者に対応する推論とみられてい だがヘーゲルにあっても、 論はこの推論の最後 」この媒介は、一面、直接性に対する媒介である。当初、媒介は直接性を媒介することとして現わ の形である選言推論で明らかにされるように、 選言推論は概念が実在性あるいは客観性へともたらされる段階である。 カントのこの理想に言及する際にもまた 次のような問題を含んでい ように 選

される。

すことになる。以上のように反省の推論がもたらした類と種とに関する判断即ち定言判断を前提にもつ推論が定言推 念の面から主観的な考察に進む。この過程は差しあたって推論の両概念を「媒概念と同じ全体性」(II.344)として示 客観性との中間をなすということを念頭において以下の考察を進めよう。推論の過程は従って「概念の実在化」 介されるものが、このものを媒介するものの本質的な契機である」(Ⅱ.351)ということである。以上、推論が概念と は偶然的で自立した個別として、主語である。しかし、推論は反省の推論の成果である普遍性あるいは必然性という概 程ともみなされる (II.351)。この過程はより完成された段階においては必然性から出発する。現実に存在しているの に関してこの推論がもつ意味の一つはヘーゲルによれば、媒介者と媒介されるものとの同一性ということであり、「媒 す。このことにより述語は主語の普遍性に対応する。一方、前述のように概念は選言推論で実在性と接触する。 この仮象そのものを止揚することでもある。このようにして、先ず主語と述語とが選言肢である。次に、述語は述語 「直接性は即且対自的に媒介であり、また目的でもあり過程でもある」と。推論は仮象であって、この仮象とこの仮象 その内面性と外面性との同一性」である (II.352)。そして、かの実在性こそ媒介者であったのである。この点は、ギ 接性へと媒介されることになる。こうして概念の内的な過程はその外面性へと止揚される。あるいは概念の真理は「 れている。 の全体性へと選言化され、選言はこの全体性を表わすとともに、この区別された選言肢の間の必然的な連関をも表わ の止揚とを通して概念の真実態が明らかにされる。概念の作用はこの仮象する働きであると同時にこの仮象を通して ムナージウムにおけるヘーゲルの『講義録(Philosophische Propädeutik)』の中でより端的に述べられている。 選言推論は一つに概念の内的な過程の完成ということと、一つに直接性との関係ということとを含む。第二の点 しかし、 最初の直接性はむしろ媒介されたものであって、従って、媒介は媒介を止揚することによって直 従っ の過 即ち

論(der kategorische Schluß)である。

離れてそれ自身としては客観的普遍であっても、主語に対してはむしろ特殊として主語に外面的な媒概念となる。 第一に、主語は存在する「このもの」であると同時に即自的には自己を規定する普遍でもある。そしてこの主語の規 欠けており、 偶然的な存在であるから、 提(voraussetzen)されているのみである。そこでは、主語を普遍性に結びつける規定も、 の統一である。 して具体性や現実性を得ているのである。一方、 して実際には、先の客観的普遍も特殊性として外面性や偶然性の中へおかれることによって却って規定されたものと 13 ので、必然性の推論がこの類と種との関係を問うことになった。しかし、存在しているものは「このもの」としての 限定する必然性も欠けていた。 である」とかいう判断である。そこでは、この判断は小前提(Untersatz)であって、定言推論におけると同様それは を示すものである。 ずれも偶然性の中におかれている。 前提には定言判断が含まれ、先の普遍性はここでは特殊として媒概念であり、 この内面性が主語と概念とを偶然性に押しやっているのである。 しかしこの統一はまだ内的であるから、以前に主語と普遍との間の関係に欠けていたものがここでも 定言推論には、ヘーゲルは理解の手懸かりとなるような式や実例を与えていない。 定言判断そのものは質的推論にも反省の推論にも含まれ、例えば「赤は色である」とか「銅 推論の三つの概念はこの偶然的な存在である主語の下で主観的に考察されるのであって、 しかし、類比 (Analogie) によって主語が具体的な普遍として解されることになった 一方、客観的な普遍である類もまだ自己の規定を措定していないから、 偶然的な存立をもつにすぎない主語も即自的には普遍性と個別性と 推論をこの偶然性の下で考察すれば、 逆に普遍(類)をこの種へと 結論は主語の本質的な性質 しかしその概略 主語を は金属

定された姿が類であり、ここでは媒概念、むしろ媒介されたものであり主語の本性としてある。しかし、他方、この 媒概念は主語の個別性に対しては客観的普遍性であるから、主語のこの媒概念への関係が定言判断の形をとって前提 (Prämisse) の一つとして現われる。第二に、主語は個別性と普遍性との統一である。この普遍性はここでは主語を

性によって与えられる非本質的な区別としてある。そして結論がこの区別を主語の本質的なものとして表明する。

規定する種差(die spezifische Differenz)、主語の否定的原理である。しかしこの偶然性の下では、この原理は偶有

提に証明が要求されたり、反省の推論におけるように前提が結論を前提するということがない。 ばれているはずのものである。従って、形式の上でも、内容の上でも、必然性の推論では質的推論におけるように前 あがっていないのである。こうして、推論における同一性が指摘され、この同一性の中で推論の各契機は必然的に結 を貫く本質」が存在している。唯、 こうして推論の内容は一つであっても、「形式の同一性」(II.345)がまだ出来 して分離しているが、 推論はこの偶然性の領域におかれることによって、実体性と現実性とを得ている。推論の三つの概念は依然と しかしそれは偶有性の下でのことであって、内面的には三者は同一であり、既に「三つの概念

遍性との統一という内容に関する、主語の偶然性である。また、従って、それは概念の内実と主語の有とを背景にした 述語との結合に関する偶然性であった。これに対し、定言推論における偶然性は必然性に対する偶然性、 然性を保持している。定言推論は反省の推論によって生みだされたものとしてまだ直接的で、この直接的な推論は、 「本来の直接的な存在 しかし「この個別」として主語は、やはり推論の外で自身の存立を保ち、普遍の内的な同一性即ち必然性に対して偶 」即ち「個別」(II.345)へと自己を媒介しなければならない。しかし、 以前の偶然性は単に主語と 個別性と普

こうして、従来の推論の外面的な過程は一つの推論の中へ、更に内的な同一性として一つの普遍の中へ収められた。

推論の過程はここでは主語そのものの中へはね返り、推論そのものは一つの仮象となっている。当初主語の内面性が、 うのも、 この過程の外で即且対自的であるという主張は一つの抽象にすぎず、主語のこの実在性もやはり思想物である。とい それが内的であるが故に、 あって、他者となる (Anderswerden)能力をもつ。他方、 (Gedankending) にすぎない。なるほど、客観性は概念の内的な過程を止揚してはいるが、しかし、ここでは主語が(fil) である。この小前提も従って、ここでこれだけ単独で妥当するものとは認められない。この「ist」はまだ空虚(leer) されているものである。従って、この小前提は主語が前提しているところものが判断の形をとって措定されたもの(ロ) 提は証明されたものではない。また、存在の直接性は証明され得るものとは思われない。このかぎり、仮言推論は蓋 AとB両者の有は有の現象に他ならない。そしてこの大前提は有の直接性の判断を得て、仮言推論となる。この小前 その認識は蓋然的である。主語は自己の概念を示してはいず、唯多くの事情にともなわれているにすぎない。 この推論のAとBとは二つの現実的存在、二つの個とみられるが、しかし、Aは同時に媒介者、媒介する有で 主語は自己の真理を自己の他者の中にもっているからである。 推論の媒介を経ないかぎり、即ち概念の過程にそれが引き入れられて考察されないかぎり、 しかし、仮言推論においては個別の有が問題となっていて、普遍性に直接関心が払われることはない。 しかし、ヘーゲルが推論で問題としているのは個と普遍との関係であり、 主語の偶然性に対し必然性を表わす推論へと展開されたのである。 Bは個別であるとともに、 もともと、 推論はまだ類比の段階に留ってい 個別がそれへと媒介される普遍 個の直接性は本来前提 しかし、 今やこの仮象 単なる思想物

の否定的な統一として概念への道程の上におかれているものである。この段階で媒介のアスペクトが転倒してしまって

から主語に立ち返って、媒概念ともなる主語そのものの偶然的な有が問題となる。現象する有こそ、必然性と偶然性と

論では概念は内的であるから、概念と有とは区別され、推論は実体性の段階におかれている。従って、 仮言推論 定するのである(II.348)。当初、有といえば、推論の両概念に残された偶然的な有にすぎなかったが、今や有は生成 しており、この否定性こそへーゲルの論理学において概念の本性を明らかにするものである。この否定性が媒介者であ の中に総括して、主語を「自己関係する否定的統一」としての個別性と規定する。この否定的統一は客観性とも関係の中に総括して、主語を「自己関係する否定的統一」としての個別性と規定する。この否定的統一は客観性とも関係 定や必然性を通して自己を展開することになったのである。ヘーゲルは推論を通して論理学のこれまでの過程を主語 せられていた。主語が自己の規定を措定していず、概念も自己を措定していない以上、推論は以前の規定即ち反省規 の領域へ引戻されている。実際、定有の推論は単純な偶然性あるいは質に、反省の推論は相関関係にそれぞれ対応さ 応することになり、 ようになり、 有(Sein, ist)であり、概念の契機もこの主語の有に支えられるかぎり、意味をもつ。こうして有と概念とは関係をもつ 63 る。以上のように、 や移行を免れて概念の領域におかれている。こうして、現実から遊離した特殊な規定性としての定言推論の媒概念は 主語は否定性を通して概念の内面性と事物の直接性とに触れながら自己を媒介する。 .る。媒介はもはや概念の抽象的な契機や個別の偶然的な規定性に関ってはいない。媒介者も媒介されるものも主語 自己を「客観的普遍性あるいは同一的内容の全体性」と「無関与的な直接性」との矛盾として、「活動」として規 において現実性あるいは直接性を取戻す。 概念の内的な過程も主語の活動を通して主語の概念へと止揚される。このことによって概念と有とは対 しかし、 推論の形式や契機の中へ展開されていた概念的な仕方が主語の存在の仕方として主語の中へ取り むしろ概念は主語の有の背後にあって媒介者として存在していたことにもなる。 主語があるいは媒概念がこのようなものとして現われるとすれば、これは既に結論である。 即ち、媒概念は「存在する(seiende) 必然性」(II.348) としてあ あるいは逆に、 主語はこれらに 推論は本質論 仮言推

各々においてそれぞれの現われ方をしてきたが、またその都度その区別は止揚されてきた。 論の主語は単に媒介されたものではなく、媒概念の本性を自己の本性として取戻した自ら媒介するものでもある。こ 論あるいは媒介されたBはこの両側面を統一している。こうして主語は直接性と媒介性との統一であり、 うして仮言推論は一方で媒介者と媒介されるものとの同一性を含み、他方で客観性と触れることになった。 する偶然的な有であり、 よって媒介される。 ものと媒介されるものとの区別、この媒介の外面性の止揚は推論の当初からの課題であった。この区別は推論 な存在(das Notwendige)」(II.348) としてある。 の統一である。他方、結論は媒概念の真理でもあり、結論において媒概念の必然性は主語の有と合一して、 の本性である媒概念は主語の外にある概念としてある。しかし、この分離においては実際は、 推論の前提においてはこの二つの側面は分離しており、主語は現存在するものであり、 媒概念こそ「客観性」の中におかれた有である。このことは同一のものの二面であって、結 他者によって媒介されるものもまたこの他者を制約してい 仮言推論において、 主語の有は移行し現象 媒介する 「必然的 の形の この

的なものもやはりその本質からいえば内的なのである(I.236,308)。偶然的で直接的な存在は、 この存在の根底にある概念からいえば、それはこの概念のための条件、素材なのである(II.92f,,348)。条件も即自的 0) ものを止揚するという仕方は、定有の推論や反省の推論でも行なわれてきた仕方であり、またヘーゲルの論理的 の展開の仕方でもある。 推論に含まれる偶然性を推論そのものを通して措定し、 それ自身他の存在の影響下におかれることも他のものの外的な意図の素材となることもあり得ない。 内的であるからこそ、 内的なものは外面性や偶然性の中におかれるのであり、 このことによってこの偶然性に対立する推論の内的 それが直接的である また単に外 なも

区別は一つの主語の有の中で統一されたのである。

普遍性の方からいえば、諸条件も現実性を得るには、「一つの個別性の中へ総括」されねばならぬ(II.347)。仮言推 象的な普遍性である。この条件がその「意味と普遍的な現存在」を得るには、現実性の中におかれねばならぬ。他方、 推論の媒介の中に自己の到達点を見出す。 論では偶然的な個別性は普遍性と一つになり、内的で抽象的な普遍性は個別性の中へと止揚される。論理的な機能は には現実の普遍性ではあるが、それは実際にはまだ現象する有、孤立した個別的な現象である。先の普遍性もまだ抽

対的な形式」従って「自己同一的に存在する内容」と定義する(II.349)。仮言推論によって主語がこのようなものと 接性」あるいは「自己関係する否定性」、「自己を区別し、この区別から自己の中へ自己を総括する同一性」、「絶、、 して提示されれば、次に定言推論で提起され仮言推論では直接考察されなかった、普遍を具体的に規定するというこ ーゲルはこれまでの論理的な規定を纒めて、論理的な機能の最高のものであるこの推論の媒介を「個別性」、「直 問題とされねばならない。こうして、推論は選言推論に移っていく。

#### (γ)選言推論

性の形であるいは措定者として、 時にこの三つの契機は同一的であるから、三つの判断は同じ内容を表わす。大前提は措定された形で、小前提は直接 ている。従って、定有の推論の数学的推論A-A-A (I. 326) のようには、選言推論は抽象的同一性に陥ることがない。 る。この三契機の各々に従って、この主語は推論の三つの判断の各々に現われて、それぞれ主語となっている。同 (α)エントヴェーダー・オーダー (Entweder-Oder) 結論はこの推論の真理あるいは主語の真実としてそれぞれこの同一的内容を表わし 選言推論の主語は普遍性、特殊性、個別性の三つを統一して

普遍性はそれ自身個別そのものであり、選言推論の主語である。特殊性は一方では種へと分肢化された類に、 成する、あるいは自己の偶然的な存在を前提された概念や内容に合致させる。更に、選言推論は仮言推論の結果であばする、あるいは自己の偶然的な存在を前提された概念や内容に合致させる。 更に、選言推論は仮言推論の結果であ 偶有性の中におかれていたのであるが、偶然性が止揚されることによってこの形式も非本質性を脱して、 17 は主語の本質的な性質あるいは主語の現存在に解消している。普遍もこのことにより完全に規定されたものとなって 遍的な領域」である (I.350)。こうして主語は概念の全体性である。個別性も特殊性も「この」普遍性に完全に浸透 同一性として恢復しており、こうして媒概念としての類と主語の有との乖離は解消されている。この形式は以前には 選言推論は区別とこの区別されたものの同一性とを有している。この概念と概念の契機とは仮言推論では現われなか され、自己本来の規定をもはやもってはいない。即ち「この」普遍性の特殊性であり個別性である。 る媒介者と媒介されるものとの同一性を措定されたものとして含んでいる。ここでは主語は媒介されたものとしては あるいは主語の活動的な本性となっている。主語は自己の形成する活動(Formtätigkeit)(I. 349)を通して内容を形 った先の実体的な同一性のそれである。この同一性あるいは類の客観的普遍性は選言推論の主語の中へ形式をもった 「個別性に媒介される普遍性」であり、媒介者としては「個別として規定されたもの」、自己の全体的な特殊化の「普 そしてこのことが、 概念の実在化の一面である。 しかし、「この」 内容の形式

的普遍性」、形式をもった普遍性、 この領域を選言として含んでいる。こうして、主語は「特殊性の中で自己を完全に保持」する。述語は種の全体性か 展開された形の特殊性として主語の普遍性と均衡している。この特殊性は主語の普遍的な全領域を自己の中に収 選言推論は選言判断(A ist entweder B oder C oder D)を大前提(Obersatz) にする。主語は「展開された客観 「類の実体的は同一性」 ( II . 349 )、種へと選言化される類である。一方、 述語は

らいえば ばれているのであろうか。この問題を考えるために、先ずこの排斥的な関係について述べよう。 よって類の普遍性と同一的でもある。こうして種の全体あるいは類の範囲が規定される。ここでは概念の作用が排斥 個別性として現われる (I.350)。各々の種はこうして単に相対的に区別されるのではなくて、他の種を排斥して一つ はEntweder-Oder として現われる。この排斥によって、特殊は自己関係する規定としてまた他者の排斥をともなう であるから、そこでは相互の排斥が生じる。従ってこの場合、述語は「種の否定的な関係」 (II.298)であって、述語 展開された主語を含む大前提とそこでは主語が一つの存在へと限定されている小前提とは如何なる必然的な関係で結 の作用でもある。 の種へと限定される。他方で、各々の種はこの排斥的関係によって互いに同一的であるのみならず、またこの関係に しかし、 如何にしてこの作用が推論を構成するための小前提を得ることができるのであろうか。あるいは全体性へと 「種の実体的普遍性」として Sowohl-Als として示される。しかし特殊化は区別の作用であり、否定的統 選言化の作用であるこの排斥する作用が選言判断を越えて、更に選言推論を構成することになる。

々は「それ自身であるとともに、また自己の他者でもある」。「このことにより各々は自己の規定性をある他者におい Ų この他在の自己内止揚として自己の非有との関係である。 てではなく、自己自身においてもつ。各々は専ら自己の他者に関係することとして自己自身に関係する。」「 各々は、・・・・・ とは不可分な関係にある。そしてこの排斥的関係は以前に、 (的)他者性 (Andersheit) 反省的関係からいえば「各々が含むところの自己の他者はこの他者が単にその中に契機として含まれるはずのも 特殊性はもともと「他者への排斥的関係」(II.249)であった。排斥ということと他者 かくて、自己の非有は自己の中の契機にすぎない。 「対立」の中で規定されていた(Ⅱ.43)。対立の両項の各

思惟や事物の本性を否定性を通して「他在において自己と合致する」ことに見出している。本質論の最初の単純な排 詳細な研究とみなしている。プラトンは存在するものの本質的な規定としての非有を主張しようとしたのである。そし もの一般である。以上のように、ヘーゲルはプラトンの哲学から自己の結論を引き出している。こうしてヘーゲルは《8》 進めて「より詳細に規定された非有は他者の本性である」という結論に達した。他者であるところのものは否定的な て、プラトンにおいて最高の形式であるものは有と非有との同一性であると評価されている。プラトンは一層研究を 話篇「ソフィスト」において「有と非有」とについて研究し、パルメニデースに反対して「非有が存在する」こと、 ニデースの有として、しかしヘーラクレイトスがいったように無に同一な普遍として把握した。更に、プラトンは対(E) に向け、この矛盾を自己の中で解決しているものが普遍であり具体者なのであるとした。プラトンは絶対者をパルメ とともに他者でもある。これは矛盾であり、 存在は他者によって規定されていて、他者への相関関係の中におかれている。これらの有限な存在は自己自身である ゴラスのヌースに比べれば具体的であるが、しかし、これもまだ抽象的であったからである。現象する物、(3) 省と呼ぶ。ここに自己から自己の非有を排斥する関係が生じる。この他者と非有との結びつきをヘーゲルはプラトン のの非有でもある」。こうして、各々は一つの同一的関係において、自己の非有が存在するかぎりにおいてのみ存在 (I.42)。この自己の他者とこの他者の非有(他者の他者)とを通して自己の存在が成立してくるのをヘーゲルは反 「自己同等的なものも他在に関っている」ことを証明した。ヘーゲルは「ソフイスト」篇を有と非有とに関する一層 あるいは、各々は、自己の他者が存在するかぎり存在し、また各々は自己の他者が存在しないかぎり存在する へーゲルによれば「プラトンは普遍を規定しようとした」。というのは、ソクラテスの善はアナクサ 解かれていない矛盾である。プラトンはこの弁証法を普遍を規定するの

斥的関係は概念の中で特殊性として更に選言関係として現われ、推論を完成させる。

的な自由そのものなのである。」更に、概念自身も自己を契機へと区別し、概念自身はこの契機の中に消失する。 普遍性に結ばれねばならない。個別の活動も概念と不可分であることが示され、この活動は実体性の下におかれる。 この実体性を通して推論は個別的な主語の有から再び概念の中へ復帰する。 体性であることを示す。 相関関係は現実性へと自己を止揚する」。しかし根拠はまだ本質の領域における概念の統一にすぎず、 とを概念に媒介する。更に、必然性の推論を通して概念は反省の過程を自己の中に止揚する。概念自身が条件、 ることが明らかにされた。この存在は自己の活動を通して自己に自己の規定を与える。 在と措定と」を得る。こうして、現実は自由な現実である。「概念そのものは必然性の力そのものであり、また現実 である。 必然性」に委ねられている。こうしてこのものの現実性は自身の現実性ではなくて、 する両項をもたない純粋な関係に他ならない。 「十分顕在化されていない概念」であり、 主語の有そのものが概念と関係するものであることが示される。こうして、 両者の統一は概念である。 の完成は同時に概念の内的な過程の完結である。ヘーゲルはこの過程を次のように総括する。根拠や相関関係 しかし、現実的な存在はこの必然性を通してこの他者において自己と合致し、この他者において「自己の存 この概念がこれらの契機に対立して現われる。同時に、これらの契機は推論を通してそれぞれが概念の全 反省の推論では、これらの契機が具体的な存在の下におかれ、 何ものをも自己の中へ侵入させようとしない現実的な存在も「被措定有へ移行する 「概念の抽象的な側面」にすぎない。なるほど「実存は根拠から現われ 相互に関係するはずの二つの実在も、この関係の外で実在性を保って 主語は個別として概念の契機を統一する。 この主語は概念の契機と自己の有 ある他の現実的な存在の現実性 むしろこの存在が媒介者であ しかし、この孤立的な規定は 相関関係も関係 推論

結を推し進めるとともに、この完結により概念を直接性へ媒介する。 この客観性はまた概念が獲得するような実在性でもある (I.351)。こうして、否定性は概念の内面性の展開とその完 「この根拠と条件とによって媒介され、この媒介の止揚によって自己同一的である直接性が実存である」と規定された あり、「自己の他在からそしてこの他在において自己自身を恢復した概念」である(II.352)。以前には、「事物は実 が、同時に「この媒介の運動はこの媒介の止揚である」。従って結果は「この媒介の止揚によって出現した直接性」で 従って、概念自身が他者を前提している。概念の内面の完成はそのまま概念の他在への到達である。概念と現存在と かし、他者は推論の内部でのみ問題になるのではない。概念が根底にもっている否定性は他者性と不可分であった。 立的な存在と思われたものも、この推論の過程の中でそれは他者によって媒介されたものであることが示された。し 性、活動性、交互作用等の段階を辿ることによって、概念は自己を自己へと媒介する。こうして概念は「顕在化され の関係は哲学の伝統的な課題であるが、この点でヘーゲルは推論の結果を次のように表現する。「推論は媒介である」 た完全な概念」(II.352) となっているとともに、また自己がこの措定者であることをも明らかにする。一方、当初自 (II.99f)。これに対し、推論の終わりでは恢復された有が現われ、それは「事物」即ち「客観性」である (II.352)。

て並べられている。反省の推論や必然性の推論では事情は異なる。これらの推論では、それぞれの推論の主語の特性 ここで振り返って、推論の二つの前提の関係について考察しよう。定有の推論では二つの前提が抽象的な規定に従っ (アア)大前提と小前提 概念の契機の区別と媒介の二面性とが解消されることによって、推論の形式も止揚される。 その目的の面でも完成されている。

現存在するものとして示している。従って、この主語は即自的には概念と直接性との統一である。 定する否定的な原理である。そして、 あるいは A この目的は媒概念でもある種差や類の原理を探り出すことによって達成される。選言推論の小前提ー「Aist aber B.」 従って小前提は無媒介的な判断である。 越えた直接性の中でその真相が明らかにされるものであって、ここでも小前提の認識は前提されたものとみられる。 ここでは前提されているにすぎない。仮言推論では、小前提は「A ist.」という判断である。この「ist」は単なる概念を(8) には媒介する直接的な存在と媒介される直接的な存在との同一性が措定されている。こうして、 を統一するものであった(II.324)。更に、小前提は主語のこの普遍的な本性を直接性との合一において、即ち主語を り方に即している。 の合一として示される。従って、大前提と小前提とはそれぞれ概念の一面を表わしている。 一方、 前提的でもある。 小前提は個と類あるいは種との関係を表わしているが、これは必然性の推論の内容となるはずのものであって、 ist aber nicht C noch D」!は、大前提で展開される主語の普遍的な本性を示す。この本性は主語 推論の目的は、 小前提の直接的な判断の内容は大前提へと措定され、その真実は結論において措定と前提と 普遍を具体的に規定することあるいは個別性と普遍性とを統一することである。 もともと形式的には普遍を媒概念にもつ推論は否定を通して普遍性と個別性と 推論は推論そのものの外面性は止揚するが、しかし、 推論はこの点で概念のあ 概念は自己を措定する 推論は形式の面でも それ故、 選言推論

が大前提の中へ措定されている。これに対し、小前提はこの主語が前提しているところのものを表わす。

反省の推論

近い類(genus proximum)を決定する種差はここでは問題とはならない。もちろん、最も近い類であるための条件は しか 概念は否定性を通して客観性と関係する。 従って、 類の原理もこの客観性と不可分である。

なった形式へ移行するかどうかを、また実際に移行するのを見る」ことである。しかし、このことは既に概念の範囲(8) 考察し、概念の規定性としての概念の規定性に即して、なおこの規定性が概念に属し概念の中に現われる規定性と異 われない。このためにまず要求されることは「概念をまずそれ自体として即ち概念として規定されるかぎりにおいて(②) は概念の契機であって、種を理念に属し概念以上の実在性をもつような形態 (I. 300)で規定することは推論では行な あげられている(П. 299)。しかし一つの存在の最も近い類が何であるかは推論では示されない。推論で問題になるの

#### 注

を超えたことである。

- (1) Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften. § 83( 以下Enz.と略)。概念論は理念論を含む。ヘーゲルの理念 G.Lasson.~I,IIをそれぞれI,IIで表わし、アラビア数字はページ付を表わす。 の定義は十全な(adäquat)概念あるいは客観的な真理である(I.407)。—— Hegel,Wissenschaft der Logik(Ph.B.).hrsg.v.
- (2)ヘーゲルはカント哲学に対し、就中この哲学が論理学に関してもっている功績について高い評価を与えている(I.44)。しか 進されなかった」と述べられているのであるから(I.46)、論理そのものの展開とその仕方についてカントと対照させる必要 それらの相互の連関、これらのことは考察の対象になっていず、」「思惟規定の本性の認識はカント哲学によっては少しも促 がないと考えられたのであろう。 論述には得るところがなく」、「思惟規定そのものが何であるかということ、 思惟規定が相互に相対して もっている 規定性と ような場合でも、このことにはヘーゲルはいちいち言及はしていない。もっとも、「思惟規定そのものについてのカントの し、ヘーゲル自身の論理の展開や論理規定がカント哲学のそれと、またこの哲学で述べられる思想と関連があると思われる
- (α) I.43f., 46f.° II.211, 213f.° Enz. §83 Zusatz, §159 Zusatz°
- られるものではない。この点で、J·N·フィンドレイの「明らかにヘーゲルは彼の判断に関する理論を新しい酒として、伝 判断の分類に関しても、ヘーゲルのそれは発展系列をなすものであって、分類された判断がそれぞれ等位的に並べ

統的でカント的な分類の古い器に注ぎこもうとしている」という評価はカテゴリー(反省規定)や推論についてのヘーゲルの 分類にも該当することであろう (J.N.Findlay,Hegel: a Re-Examianation, New York, p.235)。

- (5)この述語の「赤い」はヘーゲルにあっては質と考えられていて、単に人間の感覚の中にある反省的な規定とみられていない。
- (Φ) Hegel, Werke 4 (Suhrkamp). s.154.
- (7)ロゴスあるいは本質における類と種差との不可分性を主張し、 種差の中に原理を見出そうとする考え方はアリストテレスの
- (8)既に彼の『イエナの論理学』(Hegel,*Jenenser Logik,Metaphysik und Naturphilosophie*.hrsg.v.G.Lasson,Hamburg)で主 思想の踏襲である (Aristotelis Metaphysica,1038a,1043a)。
- 性と結合されるものの矛盾とが措定される」と答えている(op.cit.s.102ff.)。そして、推論のこの矛盾の解決を否定的統一、と述語との関係である必然性が推論によって措定されるかどうかが問題であると問い、「結合の必然性に代って、結合の偶然
- 他在化する道程(der Weg des Anderswerdens)と反省の道程(der Weg der Reflexion)とに求めている(op.cit.s.105)。
- (9)願望の表現も仮言判断の形を採る。例えば「もし私が鳥であったなら」という表現においては、この存在(鳥でもある私) 考え方からすれば問題とならないであろう。しかし、この表現の中に運動の能力の関係(歩行と飛行との)を見出す場合、 は、もともと「ペガサスが存在するとすれば」という表現におけると同様種差が無視されているのであるから、ヘーゲルの
- このA、Bが それぞれ如何なる存在、如何なる内容を表わすものかは この表現の内部では決まらない。このかぎり 含意を から含意(implication)の形式が導き出された。ヘーゲルの論理学においても、「Wenn A ist, so ist B」という表現においては、 他者によって媒介されているという面を含むのであるから、願望が仮言判断の形で表わされることも可能なわけである。む の共感(媒介)を読み取る場合、これらの場合にはこの表現は仮言判断としての意味をもつであろう。願望は自己の存在が また鳥と人間とが自然の中にそれぞれその存在の根拠をもつことによりこの表現を鳥への讃美と解してこの表現の中に一つ 前件そのものが二つの存在を含んでいるということによってそれ自身仮言判断である。更に近年、 仮言推論
- (10)仮言判断の必然性とは「直接的な存在と互いに差異するものとの同一性」である(11.300)。 この判断はヘーゲルの最も単純な要求を満たしていることになろう。

媒介されていなくてもかまわないのである。あるいは、前件も後件も正しくて、単純な有の関係を表わしているとすれば、 否定する理由はない。もともと前件は有の否定的な面を表わしているのであるから、後件は媒介を要求してはいるが、また

- (I) Hegel, Jenenser Logik, ....s. 100f.
- (12)この否定的統一(die negative Einheit)はヘーゲルの論理学の展開に関る基本的な術語であって、 殊性とが相互に浸透しあう」(op.cit.s.27)。 4 (Suhrkamp).s.26)。また「真の媒概念である普遍性においては、否定的統一即ち主観性と客観性とが、内容と現存在の特 で普遍的な統一へ高められている。あるいは逆に、普遍は個別化されて現存在の多様性の中へ歩み出ている」(Hegel, Werke あり活動性である。この否定的統一において、区別された多様性である特殊性と現存在の条件とが一つに総括されて、単純 に見出される。例えば次の様に述べられている。「媒概念としての個別性は否定的統一であって、この否定的統一は生成で 彼の著作の多くのペ ージ
- (13)仮言推論に留るかぎり、主語の活動も条件にすぎない。更に、これらの論理的な形式としての推論においては主語が自己 従って、今対象とされている推論は概念の直前の姿である交互作用を超えることがなく、これらの推論には概念の推論に当 るものが登場しない。もっとも判断には概念の判断が含まれている。しかし、この判断の述語の「良い」ということもまだ 概念と一致するということは問題とならない。このために必要な主語の活動乃至行為は客観性に現われる推論に属している。 「良いもの(das Gute)」ではなくて、主観的な述語にすぎない。
- (4)また次の様にも述べられている。「エントウエーダー・オーダーは自余のものを一切排斥し、自己の中に全領域を収める。 性を区別な単純な原理として自己の中に内在せしめている。種はこの原理によって規定され関係づけられている。」一方、「この全体性は客観的普遍の否定的統一の中に自己の必然性をもつ。この普遍は個別性を自己の中に解消しており、この個別 種はその規定性の関係を通して述語の普遍性を構成する」(1.298)。しかし一つの普遍も規定されたものとしては、より高 者へ移行することの必然性、限界概念の重要性はヘーゲルによって強調されている。 次な普遍性に関係している。ここでこのことを考察するのが課題ではない。だが自己の限界を超えて、この限界を通して他
- (13) Hegel, Werke 19 (Suhrkamp).s.64°
- (4) Hegel, Werke 18 (Suhrkamp).s.467f.°
- (1) Hegel, Werke 19 (Suhrkamp). s.64f.°
- (12) op.cit.s.66°
- 13) op.cit.s.69f.°

れるものと思われる。

- (20)op.cit.s.73f.。更に、「この否定的なものは同じもの、自己同一的なものである。そして同一の観点で、他者が同一ならざるもの であり、また同様にこの同じものが他者でもあるということである」と述べられている。
- (치)Hegel,Phänomenologie des Geistes. hrsg.v.J.Hoffmeister.Hamburg.s.178, Enz.§159.°
- $(\mathfrak{A})$  Enz. § 193. °
- (X) Enz. § 159.°
- (24)この否定性と他者性及び両者の関係、また否定性と直接性及び両者の関係あるいは否定的統一について考察することは将来
- の課題にしたい。
- (25)経験的にも類と種との関係は現われている。しかしそこでは種差が類の内的な原理となっていなくて、 ら、この種差が「この」種の内的で必然的な原理となっている場合にはもはや推論する必要がない。 あるいは前提されたものにすぎない (II.298)。もっとも、推論の目的は、種差を類や種の否定的な原理とすることにあるか 単に見出されたもの
- (26)従って、推論の問題は媒概念に帰着する。この点は既にアリストテレスによって充分認識されていて、彼は認識を成立 seinem Denken, でアリストテレス哲学の根幹としてこの媒概念を取り上げたといわれる(藤井義夫著『アリストテレス』 推論について"Hegel-Die gebrochene Mitte.1958, を著したJ・v・d・モイレンは彼の別の著作 Aristoteles, Die Mitte in の媒概念の「決定的重要性」が指摘されている(原 佑 著『論理学』-改訂六刷-四三頁、五九、六十頁)。またヘーゲルの める媒概念をその普遍性と必然性とにおいて発見することに努めていたと指摘されている。そしてこれとともに推論におけ

にして両者の一体性を確信するようになったかについては、 類や種差に言及していないし、そこでは媒概念の重要性について明言されているわけではない。この点で、ヘーゲルが如何 でいる。しかし彼のイエナの時代には、まだ形而上学と論理学とが分離されていた。彼の『イエナの論理学』の推論の節は 実際彼の形而上学ではロゴスが種差を原理として成立してくるのである。ヘーゲルもアリストテレスのこの思想を引き継 この不可分性はまた論理学と形而上学との不可分性にも連なっている。アリストテレスはこれらの不可分性を承知していて、 更に、媒概念と種差とが結びつけられることにより、推論と事物のロゴス(定義あるいは本質)との不可分性が示される。 イエナの時代の有機体に関する彼の考察が手懸かりを与えてく

(28)Enz. § 193。 (27)従って、逆に概念(定義)の規定を固定的に対象に適用して、この存在の是非を断定する愚をヘーゲルは戒めている(I.457)。

(文学部助手)